

# 1

## 企画研究「学術資産としての東京大学」講演録について

研究代表 鈴木淳

「学術資産」という言葉は、ここのところ本学でよく聞かれるようになりました。2015年10月に公表された東京大学ビジョン2020のアクション1〔研究〕の③に「東京大学が保持する学術資産のアーカイブを構築し、その公開と活用を促進することで、学術の多様性を支える基盤を強化する」とあり、これに基づいて東京大学学術資産等アーカイブズ委員会が進める東京大学デジタルアーカイブズ構築事業が着々と成果を蓄積して、我々もその恩恵に与る機会が増えているのが大きな要因と思われまます。

建物、昔の学位論文、蔵書、様々な文書や遺物、さらには物の形をとらない伝統や思考方法など、さまざまな形の学術資産が東京大学にはあります。それらをどのように把握し、保存し、活用していくかが、アーカイブズ化という現実的手段に即して議論されるようになったことは喜ぶべきことです。それとともに、「学術資産」という言葉ができたことは、我々に、この大学が持っている歴史的蓄積の意味を改めて考えさせます。そして、そこで気付かされることは、我々がこの大学で行われてきたことについて、そして今行われていることについて、実に部分的にしか知らないということです。

「これも学術資産、あれも学術資産」というように思いつきはいろいろと広がるのですが、少し考えて見ると、それぞれについて、すでに長く考えてきた方がいるに違いないことに思い当たります。そこで、この企画研究では「学術資産」という言葉を大切に、学内でそれに関わる蓄積がある方々に、何が学術資産なのか、またそれを保存し、生かしていくために今までどのような取り組みが行われて来たのか、そしてこれから何が必要なのかなどをご講演いただくことにしました。そして、部局を越えた交流を促進するセンター

の趣旨から、なるべく部局の異なる方にコメントしていただき、また広く募った参加者間で議論し、特任助教の一色大悟さんや有志の院生の力を借りてその経緯を記録にとどめることに致しました。この機会に我々が知見を広めて考えるだけでなく、その成果を会に参加した人に限らず、時間や場所を越えて共有できるようにすることが、学術資産、すなわち東京大学の歴史的蓄積を生きたものにし、その有効な保存や活用につながると考えるからです。

我々も手探りながら「学術資産としての東京大学」の全貌の把握をめざして会を重ねてまいりますが、多くの方がこの成果をご自身の関心に合わせて活用され、新たな学術資産を生み出し、あるいは学術資産の保存や活用について考えて行かれることを期待しています。

末尾ながら、このような企画研究を可能にくださった株式会社LIXILグループおよび潮田洋一郎様に深く感謝申し上げます。